

言葉の違いについて

42期生

I テーマ設定の理由

中学1年生のときに埼玉から引っ越ししてきた私は、言葉の違いを体験した。アクセントの違いはもちろん、意味のわからない言葉さえもあった。困ったと思うと同時に、どうしてこんなに言葉が違うのだろうか、不思議に思った。その不思議について、この自由研究を機会に調べてみようと思う。それともう1つ、大阪弁の特徴についても調べてみようと思う。

II 研究方法

(1) 図書館に行き、資料を集め調べる。

- ① 方言とはなにか?
- ② 方言の変化
- ③ 言葉の使いわけ意識
- ④ 大阪弁の特徴
- ⑤ 大阪、東京、埼玉の言葉の比較

(2) アンケートを取る

大阪弁、共通語に対してどのように感じているか。(大阪と埼玉にて)

III 研究内容

1 方言とはなにか?

一言でいうと、方言はわれわれの日常生活語である。

人間が生活している地域社会にはどこでも方言が行われている。方言は、それぞれの地域社会に行われている生活語の体系である。したがって、社会が異なる場合はその社会に生きている生活語も違ってくるのは普通である。

方言の違いは、すべて異なる社会に見られる。

- ・山や川や海などの自然環境の障壁
- ・地域社会の成立事情や性格素性
- その成立が時間的・空間的に異なる
- 文化の交流密度の濃淡
- 政治、経済上の運営の手段と歴史
- 交通の便・不便 などなど



▲図1 全日本語の分類表

2 方言の変化

方言とは、ある地域社会を構成する人々が日常生活で使用することばの総体である。しかしながら、ひとつの地域社会は多種多様な人々から構成されている。だから、そこに生活している人々が全員同じことばを使用しなくてもよくなる。そこで、地域社会のことばの総体を大きなマンションとして考える。マンションの個人の部屋は、壁や天井の色、インテリア、窓にかかるカーテンなどは異なる。また、隣り合った人々は、壁や天井を共有している。全体では、そのマンションの骨組みを共有している。方言の場合も同じである。個人のことばは異なるが、言葉の骨組みである体系はその地域社会の構成員が共有する部分がある。

方言の変化の芽生えは個人差にはじまる。何等かのきっかけで、個人のレベルで変化した言葉が周囲に広がっていき、やがてはその地域社会全体に広がって、ことばの体系を変化させる。

(1) 方言から共通語へ

方言から共通語へと変化した理由として

- ・テレビ、ラジオの普及
 - ・学校教育の充実
- の2つがあげられる。

また、三段階の共通語化が行われている。

・第1段階として25歳～34歳の年齢層が共通語化をおこす。

⇒この年齢層は社会的に共通語に接し使用する機会が多いので。

・第2段階として低年齢層に共通語化が進む。

⇒地域社会の社会的構造が変化して、教育、マスコミの普及によって。また、この年齢層の共通語化は早い傾向を示している。

・第3段階として老年層の共通語化が高くなる。

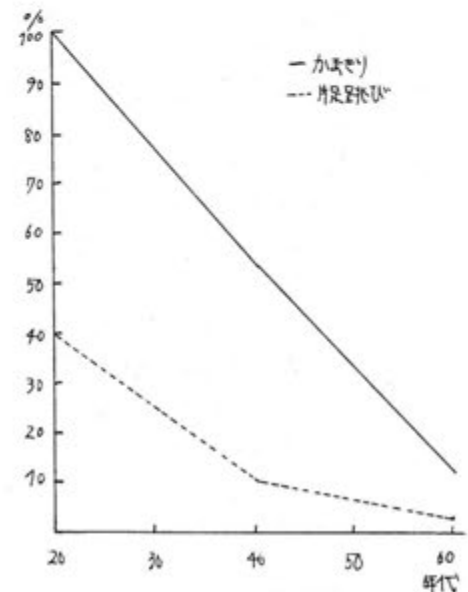
ここで、共通語が進んでいる例を挙げることにする。

・福島北部調査

「かまきり」の共通語化は高年齢層で「エボムシ」を答えるが、20代は全員「かまきり」と答えている。

「片足跳び」は年齢層が若くなると共通語形が増えるが20代で4人に1人は「ヒッコンケン」という方言を答えている。

これから、語によって共通語化の進む速度にちがいが生じていることがわかる。そのちがいは、各々の語の表すレファレンスが生活の中でどのような位置を占めているか、その語がどのように使用されているかなどの語の持っている文化的、社会的条件によるものである。



▲図2 福島北部調査結果

(2) 方言から方言へ

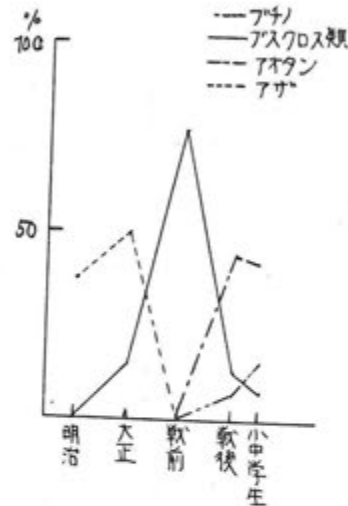
言語の変化は、けっして方言から共通語への変化しかみられないわけではない。老年層の方言から若年層の新しい方言の変化も生じている。その例をここで1つ挙げてみる。

・北海道西南部の岩内町生野

明治生まれの人はブチジ、戦後生まれはグスクロス、戦後生まれはアオタンというように年代により3つの方言形が使われ、共通語のアザはあまり使われていない。

このような場合「アオタン=新しい方言」といえる。低年齢層内に非共通語形で古方言とは異なる方言形が少なからず存在する。若年層における非共通語形で、非古方言形（老年・中年層に出現しない方言形）を『新方言』という。

共通語化とは別に、低年齢層に古方言がうけつがれたり、また古方言とは異なった新しい方言が誕生し、それがその地域内に勢力を拡げる場合もある。



▲図3 岩内町島野の「あざ」

(3) 言語変化の原因

方言の退化現象は、江戸時代から戦後のある時期までは比較的ゆるやかに進行し、それが後に急激に衰弱したとみることができる。

ある言語社会のことは、他の言語社会からの影響で変わることが多い。他方言や、共通語、外国語などの他の言語との接触による変化によって。その変化は、言語社会が置かれている地理的環境の変化によって生じた。交通、通婚圏・買物圏・文化的優劣などの変化から。これらの事象からの影響は、かつてのように、それぞれの言語集団が比較的閉じられていた時代においても認められていたが、戦後の急激な社会変化を経た今日、影響力は著しいものとなっている。

言語および、言語生活の変容面に特に大きく関与したと考えられる戦後の社会構造の変化の側面を簡単に整理してみる。

① 産業構造の変化

- ・一次産業の減少と、二次・三次産業人口の増加
- ・これに伴う都市への人口集中、それにより移住者の増加、コミュニティの崩壊、また核家族化現象

② 教育制度の改革による高学歴社会化

③ テレビ・電話、出版などのマスメディアの急速な発達

④ 高度経済成長による地域間または地域内の生活様式の均一化

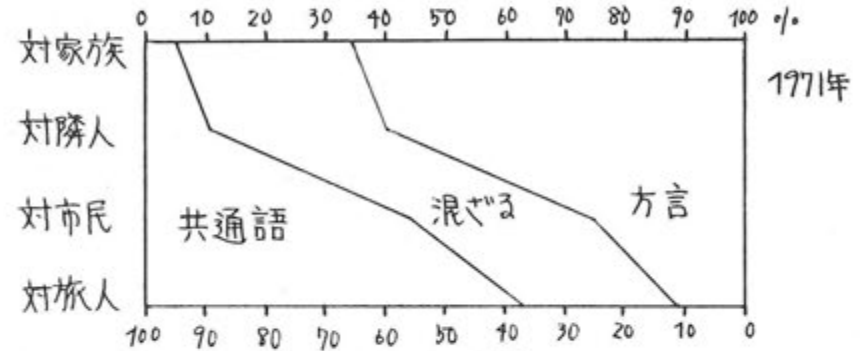
⑤ 民主政策の浸透に伴う層差の縮小と新しい価値・行動基準の模索

⑥ 国際交流・異文化社会との直接的接触層の拡大

他にも列挙すべき現象が多々あろうが、それらが輻湊し合って、共通語化を中心とする戦後の言語変容の大きな力となっていると言える。

3 言葉の使い分け意識

言語生活では、同じ人が同じ内容のことを言う場合でも、話し相手や話す状況、つまり場面に応じて、いろいろことばを使い分けるのがふつうである。



▲図4 場面によることばの使い分け意識

「家族」「隣人」と「市民」「旅人」との間で方言と共通語の選択率が大きく異なっている。つまり、一般に知人か否か、また身内・非身内といった基準が、方言と共通語との使い分け意識を左右している。

4 大阪弁の特徴

目立つものをとり上げることにする。これは、ほんの一部である。

(1) アクセント

1音節語は準2音節語に長呼される。しかし、若い世代になるほど長呼されない傾向が強くなりつつある。

(2) 語音変化

① 母音にみられる語音変化

交替現象

- iがeに、eがiに ケツネ
- iがuに、uがiに テマル
- uがoに、oがuに オシロ

② 連母音にみられる語音変化

脱落

- e aがaに ミタゲル
- e oがoに カイトク

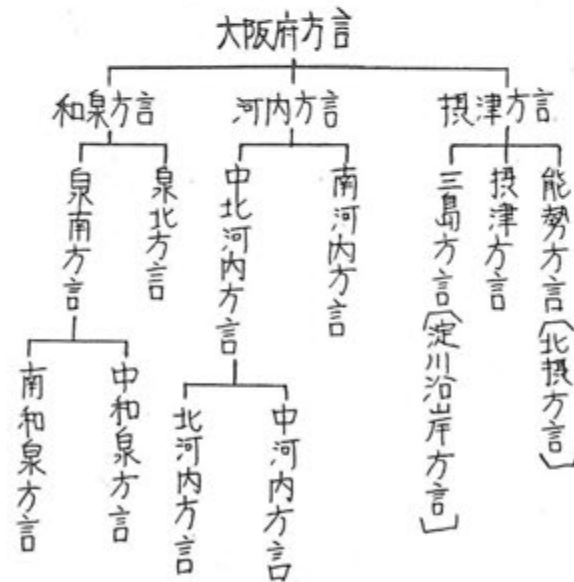
同化

- e iがeeに トケー (時計)
- i aがijaに シヤイ (試合)
- u aがuwaに グワイ (具合)

③ 子音にみられる語音変化

逆行同化

- 盗人 (ヌスビト) をヌスット



▲図5 大阪府の方言

④ 音節にみられる語音変化

脱落

サ・タ・ダ・ラ行音の脱落 ソーダ（そうです） アンサン（あんたさん）
 長音節の脱落 ショユ（しょう油） ハロタ（払うた） イコカ（行こうか）
 撥音節の脱落 ダイコ（大根） メンメガ（面々が） ゲンカ（玄関）

添加

長呼 メー（目） テー（手） シータイ（したい） キータイ（着たい）
 撥音化 アンマリ（余り） ゴンゴー（五合） ニンガツ（二月）
 促音化 ～パッカリ（～ばかり） ヨッポド（余程） ベッタ（どんじり）
 促拗音化 トッショリ（年寄り） モッチャ（餅屋） ツッキヤイ（付合い）

(3) 文法

特徴がよくわかる助動詞をとり上げてみることにする。

打消の助動詞はン・ヘンを用いる。（例）イカヘン（行かない）

断定の助動詞はヤが一般的。助詞のノに接続「ノヤ」から『ネン』が生じる。

「～ヤネン」「～デスネン」といったように使われる。

伝聞の助動詞は一般的にソーヤを用いる。

尊敬を表す助動詞はハル、ヤハルが用いられる。（例）行きハル、起きハル

5 大阪・東京・埼玉の言葉の比較

	大 阪	東 京	埼 玉
岩	ジュワ	イワ	ユワ
人	ヒト	シト	ヒト
大 根	ダイコ	ダイコン	ダイコン
飛行機	ヒコーキ	シコウキ	ヒコウキ
短 い	ミジケー	ミジカイ	ミチカイ
寒 い	サムー	サムイ	サミー
高 い	タカー	タカイ	タケー
弱 い	ヨワー	ヨワイ	ヨウェー
固 い	カター	カタイ	カテー
暑 い	アツー	アツイ	アツイ
痛くない	イタナイ	イタクナイ	イタクナイ
高ければ	タカカッタラ	タカケレバ	タカケリヤ

的環境も似ている。だから、言葉も似てくる。それに比べて、東京、埼玉と大阪では距離も離れているし、地理的環境もだいぶ違ってくる。だから、当然ながら言葉も違ってくる。そんな、3つの都市の言葉を比べて右上の表にまとめてみた。資料が古いところもあって、今では言っていないところもあると思う。けれども、ずいぶん言葉というものは違うものだ。

IV まとめ

言葉が違うのは、その土地の社会の様子、交通面、経済面、地理的環境などがそれぞれ異なっていることが原因になっている。だから、たくさんの方があるわけである。もし、同じ社会を持った2つの町があったなら、それはきっと同じ言葉、方言を使っているだろう。

そんな、たくさんの方を統一化させようとする波がある。共通語化である。この共通語化が進みはじめた、主な原因としては、戦争による、著しい社会の変化にある。

言語変化は、共通語化の他にも方言から方言へと変化するものを見られる。これは、共通語化と比べたら、本当に小さな変化であるが、とにかく『新方言』が生まれていることは確かなことである。



▲図6 女の人の呼び方

V 反省・感想

この研究をやってみて、私は方言というものは大事なものだと思った。方言は、その社会がどのように発達していったかのあかしだからだ。だから、大切に守っていききたいし、守って行ってほしいと思う。口では、頭では、みんな守りたいと考えていると思うが、それをどのように守っていくかが、問題だと思う。日本中すべての人が、共通語をしゃべっていたら、さびしいと私は思う。

VI 参考文献

- ・方言概説 編集委員
- ・関東地方の方言 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一
- ・近畿地方の方言
- ・全国方言資料 第4巻近畿編 日本放送協会編